

# 「陸上競技研究紀要」

(Bulletin of Studies in Athletics of JAAF)

## 投稿規定

陸上競技研究紀要編集委員会

### 1. 投稿資格について

特に制限は設けない。

### 2. 投稿内容および種類について

投稿内容は陸上競技についての理論と実践に関するもので、内容に応じて、総説、原著、資料、指導法および指導記録の報告などに分類される。スタイルは和文、英文のどちらでもよい。

投稿論文には上記の投稿種別を明記し、英文のタイトル、著者、所属、総説および原著には要約（150語以内）をつける。

（注：何らかの理由で英文要約等の作成が困難な場合は、編集委員会にその旨をご相談ください）

### 3. 採否等について

原稿は査読を行い、査読結果をもとに採否および掲載順序の決定、校正などは編集委員会が行う。

### 4. 原稿の書き方について

原稿は原則として、ワードプロセッサで作成する。本文は、横42文字×縦38字で1頁とする。（1頁は約1600字、刷り上がり10頁以内、図表もその頁数に含む、すべて白黒にて作成）

英文は、A4サイズタイプ用紙を使用し、15枚以内を原則とする。

計量単位は、原則として国際単位系（m, kg, sec など）とする。

また、英文字および数字は半角とする。

### 5. 文献の書き方について

本文中の文献は、著者（発行年）という形式で表記する。

例）田中（1996）は -----

文献は、原則として、本文最後に著者名のABC順で記載する。書誌データの記載方法は、著者名（発行年）、論文名、誌名、巻（号）、ペー

ジの順とする。

例）吉原 礼，武田 理，小山宏之，阿江通良（2006）女子棒高跳選手の跳躍動作のバイオメカニクス的分析。陸上競技研究紀要，2：58-64。

伊藤 宏（1992）陸上競技の発育・発達。陸上競技指導教本—基礎理論編—。日本陸上競技連盟編，大修館書店，55-72。

同一著者，同発行年の文献を複数引用した場合は発行年の後に a, b, c をつける。

例）田中ら（1996 b）は，-----

### 6. 原稿の提出先

投稿原稿（本文，図表など）は，下記へ E-mail の添付資料として送付するとともに，プリントしたもの1部を郵送する。

〒163-0717

東京都新宿西新宿 2-7-1

小田急第一生命ビル 17 階

日本陸上競技連盟

「陸上競技研究紀要」編集委員会宛

（Tel 03-5321-6580 Fax 03-5321-6591）

E-mail: kiyou@jaaf.or.jp

### 7. 原稿の締め切り

原稿の締め切りは特に設けず，随時受理し，査読を行う。ただし，2015年度版は，2016年1月末日とする。

### 8. その他

本研究紀要に掲載された内容の著作権は公益財団法人日本陸上競技連盟に帰属する。

（2015年12月 改訂）









## あ い さ つ

公益財団法人日本陸上競技連盟  
専務理事 尾縣 貢

オリンピック・パラリンピックイヤーを迎えました。本連盟は、4年に1度のオリンピックをターゲットとして定め、それに向けて種々の活動を展開しています。いわば、本年は区切りの年であり、4年間の強化活動、そしてその活動をサポートしている医科学、普及育成などの活動の集大成の年になります。それとともに、リオデジャネイロ大会は、2020年東京オリンピック・パラリンピックに向かう道中の道標となります。すなわち、リオデジャネイロ大会終了後には、4年間の活動の評価点検から得られる知見を東京大会に向けての強化戦略に活かすことを考えていくこととなります。

ここで、2012年ロンドン大会後から現在に至るまでの医科学のサポート活動や普及育成の活動を振り返ってみた時に、「強化現場に入り込んだ活動ができて」「テラーメイド型のサポートが増えている」「限りあるタレントを育成する方策を検証している」などのポジティブな評価が浮かんできます。これは、それぞれの委員会活動が活発になり、そして委員会の中の連携が強まっていることを意味するものです。このうちの委員会の連携というのは、東京大会での陸上競技チームの活躍を左右するキーワードの一つになることなのでしょうから、さらに推し進めていかなければなりません。

オリンピック強化のサポートに加え、これらの委員会活動に求めるものがもう一つあります。それは、2020年以降に、「強化と一体となった医科学サポートシステム」「効果的に強化につなげていく普及育成システム」などをレガシーとして残すことです。そのためには、リオから東京までの4年間の活動には、そういった観点を明確に盛り込んでいく必要があります。

そして、これらのサポート活動の拠り所となり、また行ってきた活動を資料として後世に伝えていくのが陸上競技紀要であると考えています。また、コーチが本紀要を読み、そこから得られた知見をコーチングのツールとして活用することが日常的になれば、わが国のコーチングのレベルは確実に高まることでしょう。

# 陸上競技研究紀要

Bulletin of Studies in Athletics of JAAF

Vol.11 2015

## 目 次

### 【資料】

日本代表選手の青少年期における運動遊び経験およびトレーニング環境  
ー日本代表選手に対する軌跡調査ー  
・・・・・・・・渡邊將司ほか・・・4

棒高跳における空中動作の上昇局面に関する運動学的研究  
・・・・・・・・池和田克彦ほか・・・16

中学陸上競技者におけるコントロールテストと競技成績の関係  
・・・・・・・・加藤和樹ほか・・・27

### 【特集企画】

陸上競技における体罰・暴力の課題と解決の方向性  
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33

【日本陸連科学委員会研究報告 第14巻（2015）陸上競技の医科学サポート研究 REPORT2015】  
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53

【エキサイティング メディカル レポート】  
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・155